

羊飼－羊の比喩とダビデの理想化

まず、詩編78編52節から72節を祈りつつ読んでみよう。前節までのイスラエルの頑迷の告発・告白と打って変わって「神は御自分の民を羊のように導き出し/荒野で家畜の群れのように導かれた。(52節)」という聞き慣れた羊飼－羊の比喩が登場する。そして、「彼らは信頼して導かれ、恐れることはなかった。海が彼らの敵を覆った。」(53節)と続き、神の護りと神への信頼の叙述となる。しかし、また、再び北イスラエルの不従順の指摘がなされ、最後には神が北イスラエルではなく、南ユダ王国、ダビデを選ばれたことに及び、典型的なシオン伝承「聖なる山」(54節、68節)、ダビデ王朝信仰が告白されている。(聖所はシロ、ベテルからエルサレムに移る)「彼が無垢な心をもって彼らを養い/英知に満ちた手をもって導いた」(72節)は、王国史観そのもので、ダビデの神話的理想化がみられる。礼拝も、華美で形式的な「神殿礼拝」を受け継いだローマ・カトリック教会や聖公会、ルター派(祭政一致)に対して、簡素で聖書の朗読とメッセージ中心の「シナゴグ」形式を受け継いだバプテスト(自由教会、政教分離)の流れに大別されるであろう。カルヴァン派はその中間に位置する。

1. 神は導く

52-54節に「導く」が4回も登場する。原語は「先立ち行く」、「導く」(ガイドする)、安全に「導く」(リードする)である。新生讚美歌548は旧翻訳が「神の導き」の面がしっかり翻訳されておらず、松見が大谷・レニーさんの注文で翻訳し直したもの。Guide me, O Thou great Jehovah (William Williams, 1745)。この導きに民は応答として「信頼した」(53節)と言いたい処であるが、「神が安全に導かれた」というのが元々の意味である。

神はヘブライ人の紅海渡渉を守り、約束の地パレスチナを目の前にするヨルダン川東岸へと導き、イスラエルの嗣業の地を与えて下さった。

2. イスラエルの民の不従順

再びと言うか三度目というか、イスラエルの神への背き、裏切り、偶像礼拝(バアル豊穰神崇拜)に言及している。シロでの天幕礼拝、そこに置かれていた「神の箱」、契約の箱は敵(ペリシテ人)に略奪されてしまった。(サムエル上4-5章)イスラエルの惨劇は「哀歌」として、「火は若者をなめつくし、おとめは喜びを奪われ、祭司は剣に倒れ、やもめは嘆くことすらしなかった。」と歌われている。現在もウクライナへのロシア軍侵攻、EU

とロシアの代理戦争の戦場となって被災している人々の姿を私たちは、テレビやSMSの映像で見ている。しかし、双方が外見的にはキリスト教信仰に立っているのである。その他の権力者の跋扈・横暴を見る時、またそれに追従する人々を見る時、つくづく人間の持つ「罪」、偶像礼拝を考えさせられる。そのような状況の中で絶対少数者であるキリスト教会に何ができるのか？ ウクライナのロシア人もウクライナ人もそしてEU諸国の民衆が教会で「平和」のために祈っている映像もまた映し出されている。それもまた、真実なのであろう。

3. シオン伝承の成立

主なる神は眠りや酔いから醒めた戦士のように、奮い立ち、ユダ族にその信仰を継承させる（65-72節）。しばらく登場しなかった「主」が登場するがここでは、「ヤハウエ」ではなく「アドナイ」である。アサフの指導の下での神殿礼拝は神名「エロヒーム」によったのであろう。士師の時代の末期のことであろうか？ 暗黒の300年は、「神は眠っていた」ように感じられたのだろうか。神は目覚められた！ 65-66節はサムエル、サウル、ダビデを想定しているのだろうか。神は「ユダ族」とエルサレム、そして、「ダビデ」を立てて、北イスラエルをふくめた神の民「ヤコブ」を養う者とされた。この神の新しい導き（シオン、エルサレムでの礼拝）はあたかも新しい天地創造のようである。「御自分の聖所を高い天のように建て、とこしえの基を据えた地のように建てられた。（69節）70節以降は、再び神・羊飼—羊・イスラエルの比喩が用いられ、羊飼ダビデ—羊の主題に替えられている。新共同訳の72節には「養い」が2回登場するが原典は「導いた」

（*yanhêm*）が1度登場するだけである。ダビデは「無垢（直き）な心」と「英知に満ちた（聡明な）両手」の両方を具現化していたとのことである。しかし、主権はあくまでも神にあり、この事実こそ普遍・不変である。そして、世界史における「救いの歴史」は、神の国（支配）の中に存在するキリスト教会についても依然と「謎」のままであるが、信仰者と教会は神のこの主権に信頼し、従順であることが肝要である。